

2. 地域の治安状況

今回の調査対象地域の治安状況をまとめたものが、表2-2-1である。犯罪の認知に関する公的統計については、平成10～12年に認知されたひったくりの件数を町丁目別に集計したものである。このひったくりの町丁目別の認知件数は、実数と人口1,000人あたりの認知件数の2つの指標を示した。平成10～12年に認知されたひったくりの件数は、調査対象地の所轄署の範囲全体で375件であるが、これを調査が行われた町丁目別にみると、3年間で1町丁目あたり平均5.46件発生していることになる。認知件数が0件だった町丁目は4つあり、調査対象地域の84.6%では10件以下であった。認知件数が最も多かった町丁目では、3年間で21件ひったくりの発生が認知されている。これを町丁目の人口千人あたりの認知件数に換算すると、平均3.49件となった。最も値が大きくなった町丁目では、3年間でひったくりの認知件数が人口千人あたり38.87件と極めて高くなったが、これは駅前近くの人口の少ない地域で今回の対象地域内で最も多くのひったくり事件が認知されていることによる。

調査対象者が回答した、居住地域内での過去5年間の犯罪被害経験については、バンダリズム（車や壁が無法に壊されたり、落書きされること）、ひったくり、性犯罪（ちかんなどの性的犯罪）の3つの罪種について、町丁目別の回答者の被害経験率をまとめたものである。バンダリズムについては、被害経験率が平均2.9%、最も被害経験率が高い町丁目では、回答者の1/4が過去5年間にバンダリズム被害にあっている。ひったくりについては、今回まとめた3罪種のうちで最も平均被害経験率が高く、平均4.9%となっている。被害経験率が最大で50%となっているが、回答者数の少ない1つの町丁目で計算上の値が高くなってしまったため、約8割の町丁目では被害経験率が10%以下となっている。性犯罪については、報告された被害が3罪種の中では最も少なく、町丁目ごとの平均被害経験率が0.9%と低くなっており、最大でも7.1%にとどまっている。

表2-2-1 調査対象地域の治安状況

		平均値	最小値	最大値
平成10年	世帯数	972.95	136	3114
	人口	2106.20	283	5883
	男性人口	1116.02	140	3198
	女性人口	990.17	138	2685
ひったくり認知件数(平成10～12年)		5.46	0.00	21.00
ひったくり認知件数(平成10～12年、人口千人あたり)		3.49	0.00	38.87
居住地域での 犯罪被害 (過去5年間)	車や壁が無法に壊されたり、落書きされること(%)	2.9%	0.0%	25.0%
	ひったくり(%)	4.9%	0.0%	50.0%
	ちかんなどの性的犯罪(%)	0.9%	0.0%	7.1%
犯罪不安感	駐車場に止めた車が傷つけられること	2.95	2.40	3.60
	道を歩いていて、ひったくりにあうこと	3.01	1.67	3.70
	夜道で女性がちかんにあうこと	3.29	2.50	4.00

また犯罪不安感については、居住地域内で経験することがどの程度心配かを「非常に心配である」から「まったく心配でない」までの4段階に「なんともいえない」を加えた5つの選択肢の中から回答を得た。このうち「なんともいえない」という回答には2.5点を与え、「まったく心配でない」の1点から「非常に心配である」の4点というように、不安感が高いほど得点が高くなるように得点化して、町丁目別の平均値を算出した。表に示したのは、バンダリズム（駐車場に止めた車が傷つけられること）、ひったくり（道を歩いていて、ひったくりにあうこと）、性犯罪（夜道で女性がちかんにあうこと）の3つの罪種についてである。いずれの罪種も地域の平均値は約3点となっており、調査票の「少し心配である」という回答に相当している。最小値は不安感があるという状態と不安感がないという状態のほぼ中間的な値が得られており、最大値は性犯罪の場合で見ると4点の地域があり、回答者全員が「非常に心配である」と回答している地域がある。ひったくりとバンダリズムの最大値についてはそれよりもやや低く、3点台後半となっている。

3. 住民のコミュニティ意識

地域住民のまとまりや、不審者・少年の問題行動への対応といった側面から見た、対象者のコミュニティ意識と犯罪発生や犯罪不安感との関連をまとめたものが、表2-3-1、及び表2-3-2である。数値は町丁目ごとに算出したこれらの尺度の平均値と、前節で述べた地域の治安状況に関する変数との関連を相関係数で示したものである。本節以下では、相関係数の絶対値が.20以上の項目について言及する。結果について述べる前に、用いられた変数の内容について以下にまとめておく。

「住民間のまとまり」・・・居住者同士の価値観の類似性や協働について尋ねた3項目である、「この地域では、問題が生じたら、みんなで協力して解決することができる」、「この地域の人たちはだいたい同じような物の考え方をしている」、「この地域の人たちは、お互いによく助け合う」への4件法の回答（「まったくそのとおり」から「まったく違う」）を、肯定的回答が高得点になるように点数化し、個人ごとに値を合計したものである。

「不審者への対応」・・・「不審な人がうろついていたら」という仮想の状況で、回答者本人と近所の人それぞれが、「近所の人に注意を促す」あるいは「警察に連絡する」という対応を取るかどうかという4つの組み合わせについて3段階で回答した結果を、必ず対応を取るという回答が高得点になるように点数化し、個人ごとに合計したものである。

「少年の喫煙への対応」・・・「不審者への対応」と同様に、「少年が集団でたむろして、た

ばこを吸っている」という仮想状況に対して、自分（調査対象者）と近所の人少年に注意したり、警察に連絡したりするかどうかを3件法で尋ねた結果を、個人ごとに合計したものである。

「少年の自動車損壊への対応」・・・「少年が路上に駐車してある車に傷をつけようとしていたら」という状況で、回答者や近所の人少年に注意したり、警察へ連絡したりするかどうかを3件法で尋ねた結果を得点化したものである。

「少年の問題行動への対応」・・・上の「少年の喫煙への対応」の得点と、「少年の自動車損壊への対応」の得点を合計したものである。

表2-3-1は、これらのコミュニティ意識に関する項目とひったくりを中心とする犯罪の認知・被害状況との関連をまとめたものである。最も多くの項目と関連が見られたのは、人口千人あたりのひったくりの認知件数である。「少年の喫煙への対応」、「少年の問題行動への対応」でそれぞれ-0.29、-0.30という負の相関が見られたのをはじめ、「少年の自動車損壊への対応」（-0.26）、「住民間のまとまり」（-0.23）とも負の関連が見られる。少年のさまざまな問題行動に回答者自身や地域の住民が介入する傾向が弱く、住民同士のまとまりも弱い地域ほど、ひったくりの認知件数が多い傾向がある。一方、「不審者への対応」ではほとんど関連が見られなかった。また図2-3-1には、ひったくりの認知件数と「少年の問題行動への対応」について、地域的な分布を示した。

同じひったくりの発生でも、回答者の自己報告ベース被害経験で見た場合ではコミュニティ意識に関する項目との関連が違った傾向になって表れている。少年のさまざまな問題行動に対する対応とひったくり被害の自己報告は、「少年の喫煙への対応」で負の関連（-0.16）が見られたほかは、相関係数の値は小さい。また「住民間のまとまり」との関連については、正の相関（0.28）が見られ、住民のまとまりが高い地域ほど、ひったくりの被害にあったと回答した人の割合が高い傾向がある。

表2-3-1 コミュニティ意識と犯罪の認知・被害状況

	ひったくり 認知件数 (人口千 人あたり)	居住地域での犯罪被害 (過去5年間)		
		ひったくり	バンダリ ズム	性的犯罪
住民間のまとまり	-0.23	0.28	0.07	-0.02
不審者への対応	-0.08	0.04	0.17	0.14
少年の喫煙への対応	-0.29	-0.16	-0.11	-0.05
少年の自動車損壊への対応	-0.26	0.09	0.09	0.01
少年の問題行動への対応	-0.30	-0.02	0.00	-0.02

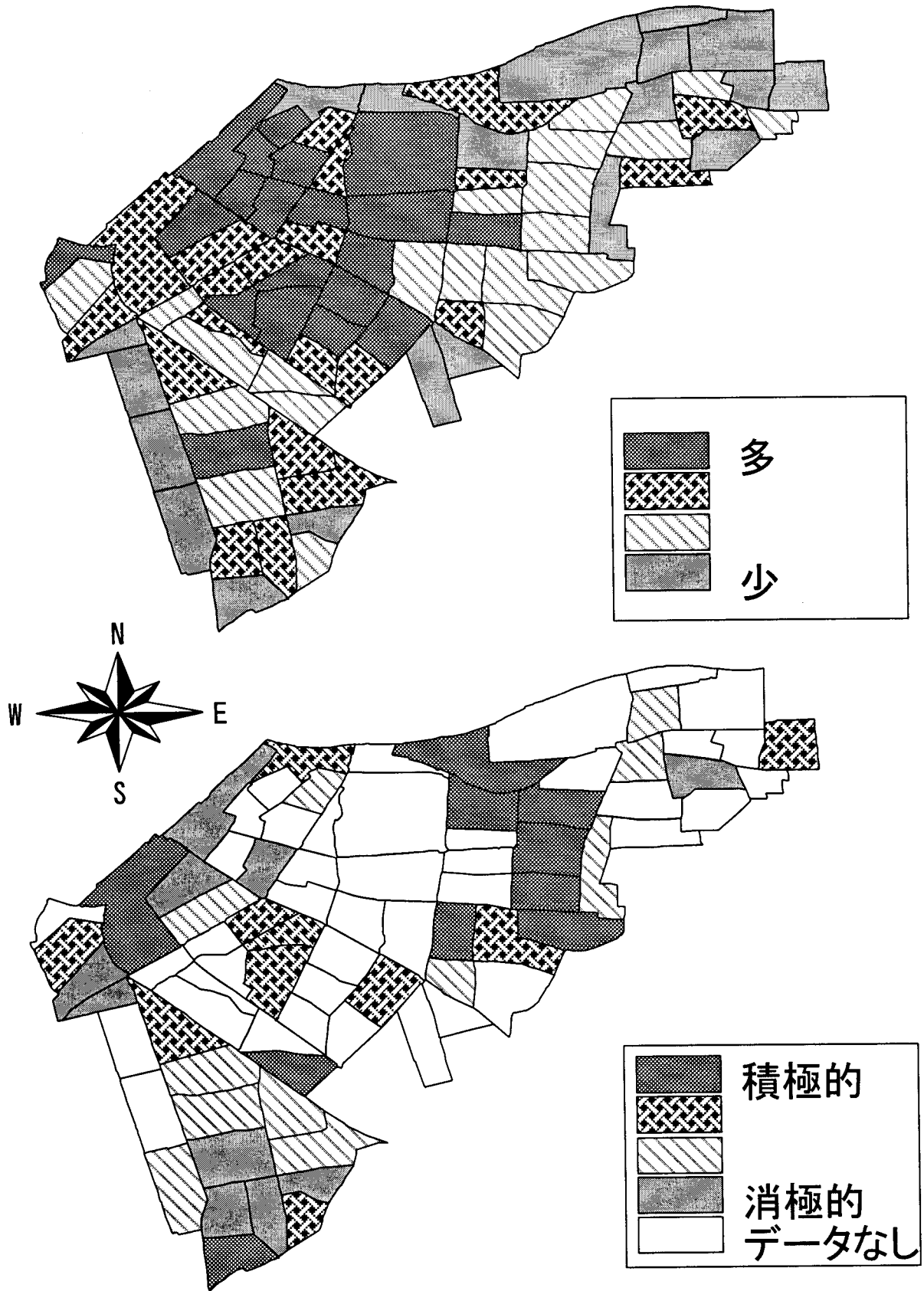


図2-3-1 ひったくりの認知件数(上段), 少年の問題行動への対応(下段)

その他の犯罪被害とコミュニティ意識の関連については、特に目立ったものはなかったが、性犯罪の自己報告とコミュニティ意識の関連については、性犯罪の被害報告の絶対数が少ないことと、性犯罪がこうした地域住民のまとまりに関する状況とはあまり強く関連しないことが考えられる。

表2-3-2は、同じくコミュニティ意識に関する項目と各種犯罪被害に対する不安感との関連をまとめたものである。バンダリズムに対する不安感については、「少年の喫煙への対応」で-.26という負の相関が見られたのみであった。バンダリズム被害の不安感は、コミュニティ意識という居住者サイドの態様とは関連せず、加害者や物理的環境との関連の方が大きくなることが推測される。

ひったくりに対する不安感についても、コミュニティ意識と明瞭な関連をもつ項目が少なく、「少年の喫煙への対応」で-.31という負の関連、「不審者への対応」で.38という正の関連が見られるのみとなっている。この2項目の正負逆の関連は、性犯罪に対する不安感の場合でも同じような結果となった。「不審者への対応」については犯罪発生に関する項目とはまったく関連が見られなかった項目であり、その一方で犯罪不安感に関する項目と正の相関が見られることから、不安感の高い地域ほど、防犯行動としての不審者への対応が積極的に見られるという因果を仮定することが自然であろう。

また、性犯罪に対する不安感については、「少年の喫煙への対応」(-.42)のほかに、「少年の問題行動への対応」(-.30)でも負の相関がある。性犯罪被害の自己報告では、コミュニティ意識との明瞭な関連は見られなかったが、少年の問題行動に積極的に介入できないと考えられている地域ほど、性犯罪の発生に対する不安感が高くなっている。なお、図2-3-2に「少年の喫煙への対応」と、性犯罪に対する不安感の関連について、地域的な分布を示した。

表2-3-2 コミュニティ意識と犯罪被害に対する不安感

	犯罪不安感		
	バンダリズム	ひったくり	性的犯罪
住民間のまとまり	0.16	0.14	0.04
不審者への対応	0.16	0.38	0.23
少年の喫煙への対応	-0.26	-0.31	-0.42
少年の自動車損壊への対応	-0.05	-0.05	-0.15
少年の問題行動への対応	-0.16	-0.18	-0.30

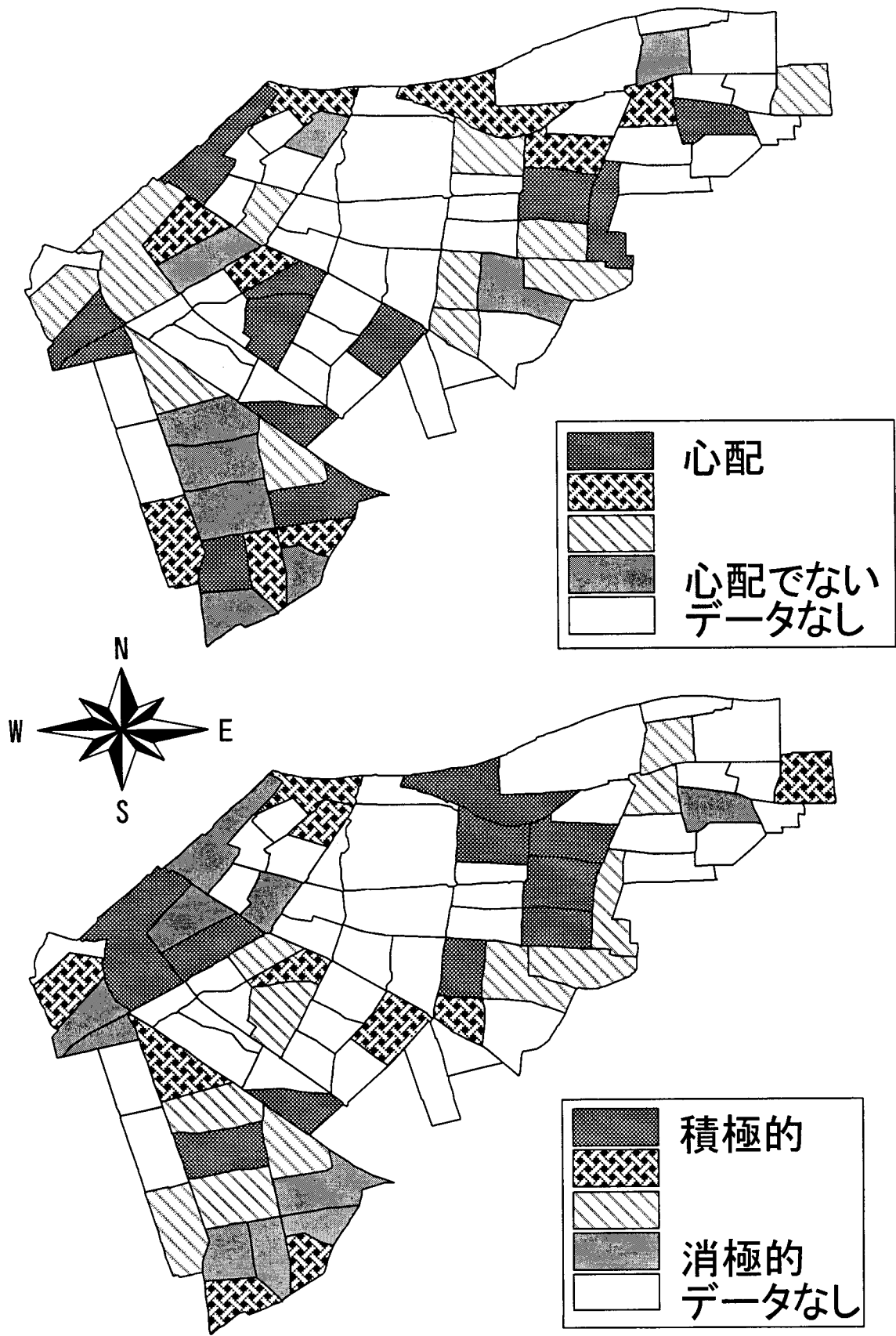


図2-3-2 性的犯罪の不安感(上段), 少年の喫煙への対応(下段)